

「列積乱雲 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

夏の晴れた日には、午前中から積雲(わた雲)が発生する。地面が熱せられ、水蒸気とともに上昇した気塊(熱気泡=サーマル)が、上空で露点に達して凝集(液化)し、可視化されたものが積雲である。



積雲は最もよく目にする雲だろう。積雲は「成長雲」の一つで、時間とともに上(高高度)に向かって成長することが多い。



積雲が大きく発達したものが「雄大積雲」である。

この時点ではまは圏界面(対流圏と成層圏の境界面)には達しておらず、まだ上に発達する余裕を残している。この段階でも雷雨が発生することはある。しかし、いよいよ圏界面に達すると、それ以上は発達できず圏界面に沿って水平に広がるようになる。それが積乱雲(雷雲)である。



積乱雲は多くの場合、雷雨を伴う。写真は宇都宮市内で撮影された、傘のように広がる積乱雲と、放電(電光)である。積乱雲の根では、激しい雷雨や降雹に見舞われていたはずだ。



先日の午後、倉賀野駅付近(高崎市郊外)で、見事な積乱雲を見た。この日の高崎市は気温が38℃近くまで上昇し、関東山地の南縁に沿って、いくつもの優勢な積乱雲が発生していた。この地点から見えた積乱雲は1つでなく、複数が並んでいた。